

まえがき

讃岐山脈南縁の中央構造線活断層系調査は平成9年度から平成11年度までの3ヶ年で計画されている。平成9年度は地形地質調査により調査の課題を整理したうえで、トレンチ調査箇所を選定した。また、反射法弾性波探査で平野部伏在断層を調査した。2年目に当たる今年度は吉野川下流の平野部伏在断層と、鳴門市大麻町から西側の鳴門断層でトレンチ調査を行った。

平野部伏在断層についてはボーリング調査で断層を確認し、トレンチでは撓曲により約2,800～3,100年前のイベントを確認した。最新イベントについてはなお検討を要するが、約1,500～1,700年前以降と推定される。また、コアの対比と完新統の堆積速度から、垂直成分の平均変位速度は1 m/千年であることが明らかになった。

鳴門断層はトレンチで断層を確認できなかったが、沖積扇状地堆積物で大規模な液状化と水圧破碎がみられた。液状化や水圧破碎を起こした地震は11～13世紀以降に発生したと考えられる。

空中写真判読によると、鳴門市大麻町から東側では鳴門断層は平野部伏在断層に連続しており、これらは一連の断層である可能性が強い。トレンチ調査の結果から2,800～3,100年前のイベントはほぼ確実といえる。しかし、最新イベントについてはまだ課題が多い。平成11年度には県西部の三野断層と池田断層でトレンチが計画されているが、鳴門断層についても補足的にトレンチ調査を行い、最新イベントと再来間隔を把握したいと考えている。



鳴門市大津町段関～大代の斜め空中写真.南から北を眺める.讃岐山脈と平野の境が鳴門断層である.鳴門断層から約 500 m 南側で沖積低地上に微高地が東西方向に連なっている.池の西側で住宅が密集しているところが段関の微高地.微高地の南縁を伏在断層がとおる.微高地南縁は比高 50cm ～ 1 m の低崖になっている.池の東側で行ったトレンチ調査によると,断層は地表に達していないで約 3,000y.B.P.以降の完新統に撓曲がみられた.伏在断層は北側に約 70° 傾斜し,大きな南落ち落差を伴う.基盤の変位量は 1,000 m 以上に及ぶ.



← 鳴門断層

板野町大寺～川端.鳴門断層は丘陵地と平野の境をとおり.丘陵地には中位段丘堆積物が分布している.写真左側の沖積扇状地には比高約 1.5 mの低断層崖が形成されている.写真右側の小規模な谷の出口でトレンチ調査を行ったが,ここでは礫層が吹き上げている大規模な液状化がみられた.断層はトレンチよりもやや南側をとおりものと推定される.